

本校の専攻科1年「文章表現法」の授業について

松崎 賜

On a Class of Japanese Writing in Advanced Course of Miyakonojo National College of Technology

Tamao MATSUZAKI

(平成26年10月1日受理)

あらまし 本稿は、専攻科1年「文章表現法」の授業項目である「一定の構成・展開による意見文の作成」をめぐって、いくつかの問題点をあげ、それへの対応などに論及したものである。この授業を始めたころの諸事情については、すでに本研究報告に掲載した。本稿の内容には、それと重複する箇所もある。ただ、数年にわたって同じ問題を考察し続けたことにより、新しい観点から論述できる事柄が少なからずあって、それらは主に「2 授業上の問題点と、それへの対応」の章にまとめた。2.1、2.2の部分には、型にあてはめる作文方法を学生に習得させる上での困難さについて、2.3の部分には、この作文方法を習得させる意義について記載してある。

キーワード [文章表現の型、反論、意見の根拠、言語表現の公私]

1 序論

かつて私は、本研究報告において、仕事文などの実用的文章を作成するための授業を導入したこと、およびその実情を述べた¹⁾。その後、数年が経過して、これらの授業内容と教授の方法がほぼ確定し、授業の結果についても、ある程度まとまった認識を得ることができた。しかしながら、特に専攻科1年の「文章表現法」の授業に関しては、現在も思案するところが多い。

当該授業では、型に則った以下のような作文を課している。前稿にも掲載したが、論述の都合上、再掲する。

論証の型

自分の考えや判断を主張して、それを相手に認めさせる文章に、ヨーロッパのレトリックとして「序言・陳述・論証・反論・結語」の五分法の形があることを、先に述べた。これから「序言」を

除くと次のようになる。

陳述 - 事実、現状を述べる。

それに関して意見を述べる。

論証 - 自分の意見が正しいことの根拠を示したり、意見通りにするとよい結果がもたらされることを述べたりする。

反論 - 例外や反対意見に対して、自分の意見が正しいことを述べる。反論する。

結語 - 自分の意見をまとめたり、どうすべきか、どうあるべきかを提案したりする。

この型を持つ文章を書いてみよう。郵便のあて名についての意見を述べる文章にする。

郵便を受け取ってあて名を見たとき、「忠夫」を「忠雄」と誤記してあると、ちょっと不愉快になる。ひどく不愉快になったのは「忠太」と書かれたときだ。「大」の上に引くべき線を、点として下に打っただけだ、という言い訳ではすませないだろう。手紙やはがきのあて名を正し

く書くことは、礼儀として守るべき基本である。

昔は、相手の身分によって、あて名につける「様」を楷書、行書、草書で書き分けることが行なわれた。今は、こういうことはないが、自分の姓名を略字で書かれると気分が悪くなる人は多い。「濱」を「浜」、「邊」を「辺」と書かれると礼儀を失したやり方だと感じるのである。字を略することを「粗略にあつかう」と感じる意識が、今も人々の心に潜んでいるようだ。

あて名は郵便を、正しく送り先に届けるためのもの、郵便事務のためのものだから、わかればいいのだ、とする考え方もあろう。しかし、郵便を受け取った人は、それが自分あてのものかを確認するために、必ずあて名を見る。あて名は郵便局員だけが読むものではない。

人を訪問するとき、まず衣服を正し言葉を改めてあいさつする。これと同じく手紙やはがきのあて名は、ていねい、正確に書くべきだ。²⁾

作文の課題は、第1回が「無用に見えて実は無用でないもの」。日頃よく見ていない、考えていないものへも視野を広げてもらおうとの意図もあって、こうした課題を何年も継続している。第2回は、「〇〇への提言」。専門的な内容でもよく、一般社会向けの内容でもかまわない。

学生には、書く内容に関して見出しを作成してもらう。それから作文に取りかからせる。原稿が完成した段階でミーティング、部分的な書き直しを経て提出、添削、講評という流れで授業を行なう。

以前は、見出しは文章の構成に資する旨、学生に説明した上で授業内に書かせ、それについて簡略にコメント後すぐに作文の時間としていた。しかし、ここ数年、作文の構想を立てる作業を習慣づけるよう、学生にもっと自覚を促した方がよいと考えるようになった。見出しをきちんと書かないと、成り行きまかせの作文になりやすい。その懸念から、見出しは自学自習として仕上げてきてもらい、成績評価に加えることとした。

さらに、数年前まではミーティング・書き直しは若干名の学生への対応で終わっていたが、ここ数年は授業時間を割いて、ほとんどの学生が初稿段階での書き直しを経て提出できるようにした。型にあてはめる作文を初めて試みる学生もいて、それでなくても彼らは作文作業の途中で行き詰まりがちであり、とりあえず完成させても自信はない。点数が低いのではないかということばかり気にする。だから、学生へのアドバイスは必要である。

作文上の注意事項として、以前よりも念入りに次

の解説を行ない、学生への徹底をはかるようにした。筋道のとおった説得力のある作文を書かせるためには、以下のことを特に考慮させるべきだと、授業を繰り返しているうちに気づいたからである。

(1) 「論証」にあたる段落と「反論」にあたる段落とが、記述内容としては重複しないこと。具体例や事実を引くこと。

(2) 「結語」にあたる段落では、自分の意見の内容と類似した他の例をあげて自説の補強をすること。サンプルの「人を訪問するとき、～あいさつする。」の部分にそれが該当する。また、結論も、単に自説を反復して終わるのではなく、それから何が言えるかに論及した発展的内容のものにすること。

(1)については、「論証」の段落で述べた根拠づけが「反論」の段落の反論にそのまま使用された作文がかなり多く、それでは同義反復になり読み応えがないからである。(2)については、当人とミーティングもするのであるから、書く内容の規模を大きくしていくことに少しでも慣れてほしいのである。学生が社会に出る前に、言語活動の幅を広げる一助になればとの思いである。

なお、本校ではキャリア支援センターの後援で、特活の時間にPR文の書き方を教えている。学生には、それにも意欲的に取り組んでもらいたい。また、PR文や意見文の書き方についてのテキストも図書館に入れている。それらの中には一般向けのくだけた内容のものも含まれているが、かえってヒントになることが多いであろうし手にも取りやすいであろうから、積極的に利用してほしいものである。

2 授業上の問題点と、それへの対応

文章表現法を開講して以来、私自ら疑問に感じたり当否を判断しかねたりする事項がある。それらをここに列挙し、現在いかに対処し、いかに考えているかを述べたい。

2.1

そもそも、根拠をもった意見を書くというイメージを学生に浸透させること自体が難しい。

自分の考えの大筋は書けるが、どうしてそう考えるのかを「論証」「反論」の段落で具体的に論じようとしないため、結局は単なる意見だけに終始し、抽象的な内容になりがちである。自分に関係の薄い他人が読む場合には説得性がない旨、説明しても、「気持ち」を分かってくれるはずだと思うのか、怪訝そうな表情を見せる。

そうすると、作文の結論が往々にして次の資料のようになりやすい。

一見アーギュメントであるように見えながら、実は前提を欠いていてアーギュメントになっていない発言・文章は、日本ではいたるところで見つけられます。これは、根拠を明確に述べなければならないという意識が多く日本人に希薄であることから来ているものと思われます。まあ、理由はどうあれ、日本でよく見かける論じかたの典型例の一つ挙げておきましょう。

これはある人が『性格』の本で類型学を論じる際、類型学が『型にあてはめるものとして軽蔑』されていることに対する反論(!)として述べたものです。

類型学、すなわち性格をいくつかのタイプわけする学説は、個性の問題にいたる半途であれそれ以上のものではないかもしれない。しかし、われわれはまず半途をあゆまなければならない。

この発言の形式が、どのようになっているかわかりやすいように言い換えると、次のようになるでしょう。

類型学はそれ自身が最終的な目的ではないかもしれないが、類型学を行うことは多少とも意義があることである。その意義とは何であるかを私はここでは述べないが、類型学を行うことは意義があることなので、私たちは類型学を行わなければならない。

つまり、この発言者は、類型学の弁護を行う際、類型学の意義を述べているかのように記述しながら、実のところは意義を何も述べていないのです。

このような「根拠を示さず結論のみを述べる文」は現代の日本では残念ながら非常に多く、この種の文に頻繁に接する若者たちを自然に同様の語り口をするようにさせてしまっています。³⁾

ここで、「アーギュメント」とは、「数個の前提(premises)と結論(conclusion)からなる文章・発言」のことを言う⁴⁾。続けて、以下の資料もご覧いただきたい。

たとえば、新聞や雑誌の投書欄によく見られるタイプの表現は次のとおりです。

「こういった人々は海外でも平気で自然破壊を行なう。これでは海外の人にどう見られることか。その点を考えてもらいたいと思います」

投書した人は何を主張したいのでしょうか？

「考えてもらいたい」という見かけ上の主張はありますが、この人がほんとうに主張したいのは、考えてもらうことではないでしょう。

(中略)

この種の発言は、単に多くの人がこういった形式の発言 - つまり、個人的な意見を述べない発言 - をしているから、その形式に従っているだけなのでしょうが、「明言しないなら反対されることはない」という気の弱い発言ともとれ、これは私にはとても不思議な発言習慣に思えます。⁵⁾

本校の国語科でも、例えば、「事実か意見か」(このことは、文章の記述という面からは、もっと厳密に説明しなければならないが)を意識するよう本科三年生の段階から促し⁶⁾、説得力のある作文とはどのようなものを説明してはいる。こうした授業を海外では小学生から行なっていることも学生の参考までに紹介する⁷⁾。また、自己PR文においては、確かな根拠をもって自分を他人に分かってもらうために体験や事実を引用するなどして具体的に論ずることが大切であるとの話をする。だが、三年生ではまだ差し迫った状況ではないためか(そのように話してくれた専攻科生もいた)、授業中に興味関心を示し集中して聴いていると判断できる学生は多くない。専門教員からも、就職関係の対応が遅れがちであることへの懸念をよく耳にするため、私の授業でも、四年生の後半からにわかに考え始めても遅いという警告めいた話をする。しかしそれほど反応がない。おそらく、就職段階では結局は誰かが手を差し伸べてくれるとでも思っているのであろうが、自ら進んで書く癖をつけないと、社会に出て計画書などの仕事文を書いたりメールを送付したりする段になってとまどうことになるであろう。この点は、学生にとって耳障りな話でも言い続けていくしかあるまい。

専攻科においても、以上のポイントをさらに詳しく説明している。だが、仕事文やPR文では、具体性のある描写(ここでは、自分の体験から得た事柄、あるいは場合によっては、出所のはっきりした引用も含む)は抽象的な考えや主観的な感情よりも説得性を持つことが、やはりなかなか伝わりにくいようである。授業でも、書き方の良い例と悪い例とを並べて比較した資料を見せているが、あとは実地訓練

しかない。

そこで、本授業の作文だけにとどまらず、自分の主張に根拠を持たせるためにはどのように書いていけばよいか、その方法の一端を、まずは理解してもらうことから始めなければならない。

学生の作文を読んで、共通の傾向だと思われることがある。

- (1)論じようとする対象についての研究が不足している。
- (2)自分の体験や、その時の心情をじっくりと見つめていない。対象とする事柄に関連した社会状況等にまで知見を広げて、自説をより説得性のあるものにする根拠を引っぱってこようとする執念に欠ける。

例えばPR文等では、(1)については、自分の志望する企業についてよく知らず、自分の気持ちを主に書いているので、なぜそこを志望するのか分からない作文が多い。(2)については、その時に努力して改善した等の表現のみに終始し、具体的にどのように感じ、どのように対応しようとしたか、周囲の反応はどのようであったか、すなわち一つの個性がどのように誕生したかの経緯が全く見えない。自分自身に向き合い、よく思い出す作業をしていないからである。同様に、本授業の作文でも、第2段落や第3段落再反論に記述してあることが描写不十分(言わんとする内容ではない!)あるいは抽象的で、自分の論点への関心はあっても、それへの強さ深さが伝わってこないことが多い。

そこで、学生には、仕事文のような作文を書く時には“彼を知り己を知れば百戦して殆うからず”⁸⁾だ、とよく話している。特に(2)については、学生から相談を受けた場合は、多少の時間を費やしてでも作業に付き合う。全く熱意のない場合はともかく、討議しているうちに、学生があたかも自分を発見したかのように喜ぶことがある。単に作文で成果をあげるだけでなく、そうした過程こそが、長い目で見れば重要である。ただ、私の経験から言っても、学生は、自らの過去や社会状況に目を向けるよう促さないと、自分からはなかなかそうした作業をしない。このごろは、本科3年生の授業で既に、PR文を書くためにも自分のことをよく覚えておくように、場合によっては部活、アルバイト、各種活動についての日記やメモなどを、なるべく克明に記述しておくことを勧めている。

2.2

「反論」の段落の作成が難しい。

学生にあらかじめ注意をしていますが、思いつかないのか面倒なのか、「反論」の段落となると、「論証」の段落で述べたことをただ反復しようとする傾向がある。この場合は、見出しをチェックする段階で指摘し、再考させるようにしている。言えば学生も気づいてくれる。

ただ、問題なのは、反論の仕方である。

反論を行なう場合、あなたは結論に対して反論を行なわなければなりません。結論以外の部分の欠陥を指摘するのが発言の量のほとんどではあっても、その指摘の目的はつねに「結論に対する反論」でなければなりません。

これはあたりまえのことですが、日常的な会話や議論では、それが必ずしも行なわれてはいません。例をあげましょう。

- A 「市民の八〇%は、レストランでの喫煙が禁止されることを望んでいます。市内のレストランにおける喫煙禁止例を出すべきです」
- B 「そんなことに費やすお金がどこにあるんだ？」

市長は喫煙禁止令を出すことが可能か否かの話をしていて、Aとは論点が違っています。

Aは「禁止令を出すべき」と述べているので、「禁止令を出す必要のない理由」(あるいは「禁止令を出すべきではない理由」)を述べるのでなければ、論理的な反論とはなりえません。⁹⁾

このように注意されてはじめて、なるほどそうかとは思いますが、実際にはそう自覚していないのが一般だと思われる。次の資料もご覧いただきたい。

問題5

Z「読書はあまりしないほうがいい。読書量が少ない人は、ちょっとでもいい本に出会おうと『非常にいい本に出会った』という印象をもてるが、読書量が多いと多少のよさでは満足できなくなるからだ」

次のうち、反論としてもっとも適切な内容はどれ？

- I いい本に出会おうと必然的に読書量が増えてゆく。
- II 読書量が少ないといい本に出会う確率が低い。
- III 多少のよさで満足できなくなるのは、その人

の感受性に問題がある。

答え

Ⅱ。

Zは「読書量が少ないほうが、読書量が多いほうがよりよい」と述べているので、それを否定するもの－たとえば「読書量が多いほうがよい」ということを述べるもの－でなければ反論となりません。したがって、Ⅰ、Ⅲは反論とはなりません。¹⁰⁾

確かに、「論理的な反論」でないと、反論された方としては、自分の意見の核心には答えてもらえず、別な理由を言い訳にごまかされたり、不当に拒絶されたりしたと感ずるであろう。だが、これまでの授業の経験上、実際の作文で「論理的な反論」を要求するのは難しいことがわかっている。作文の現場では、どうしても上記のⅡのような反論が思い浮かばず、学生も私も苦慮することがある。他人の「反対意見」を想定した際、それに対して反論すること自体が成り行き上、難しくなり、ようやく考えた反論が「論理的な」「適切な」ものとなっているかといえ、実際は先のⅠ、Ⅲなどのようにになってしまうことが多い。いわば、相手への“消極的批判”にとどまってしまうのである。

とは言え、反論の内容にあくまでもこだわって作文が進まなくなると、当然、学生も書くのがいやになり、授業の体をなさなくなる。ミーティングでは、学生の様子をうかがいながら、そのまま作文として完成させるかどうか判断しなければならない。その場ですぐ判断せねばならないこともたびたびで、私としても緊張を強いられる。何回も経験したおかげで、最近、少しは慣れてきたが。

こうした問題について、私としては、この授業のねらいを次のように定めることとしている。すなわち、完璧な作文のみを期待はしない。学生には、論理的に文章を展開する方法をできるだけ習得してもらいたい。一応できあがった段階で自己点検し、あるいは共同で討議して改善し、それを次の機会や会議等に活かればよい。議論やコミュニケーションのためのいわば“たたき台”を誰でもつくれるようになることが、社会の現場ではとりあえず必要である。この授業が、そのために少しでも有用であってほしい。

すると必然的に、この授業では作文を通じて、次のような人間形成を理念として目指していることになる(授業で直接こうした説教をするわけではない)。すなわち、社会の現場において、完全性ということ

にあまりにもとらわれないこと、ある程度の普遍性を持った意見を臨機応変に提案できる人材になること、主張ではなく議論ができる人材になることである。まさに“たたき台”としての位置に立てる忍耐強さを養おうというのである。これは、私の考えでは、対人的には「君子は言を以て人を挙げず、人を以て言を廃せず。」(社会的に公正であるためには、人物への評価と、その発言への評価とは、切り離して行なうべきである。)¹¹⁾というあり方に通じる。

そこで、学生には以下のことを強調している。

- (1)作文であれ何であれ、自分なりに事実に基づく意見を考えた場合に、それでも他人はこのような点を突いてくるに違いないという想定を必ずすること。他人の反論とそれへの対応は当然なのが社会の現場である。なぜ分かってくれないのかと不満を言うだけでは済まされない状況に追い込まれることは多い。
- (2)上記の「考えてもらいたい」式の無責任な意見でおおらず、具体的なイメージが読者に伝わるような書き方にすること。
- (3)「反論」を考える際、まずは「論証」と重複しない論を文章化すること。たとえ“消極的”反論になったとしても、重複するよりはよい。面倒でも必ず他人を意識し、それに対して自分の意見を、ねばり強く書くという姿勢を堅持することで、状況を客観的に捉える訓練になる。

そのようなわけで、授業では、作文の時間に入る前に、予備段階として、次のような資料を配付する。これは、正当ではない意見にはどのようなものがあるのかが一覧表としてまとめられていて、見やすく分かりやすい。誤った議論に陥らないよう学生に留意させるには便利である。「反論」が以下のような議論にならないよう特に念押ししている。

[種類]

...

バスに乗り遅れるなの誤謬

...

発生論的誤謬

...

[特徴]

...

まわりがみな賛成ならば、置き去りにされるのは馬鹿げているという議論

...

ものごとは、それが働く様態にあるとしたり、様態をもたらした起源にあるとしたりする議論

...

[例]

...

英国以外のヨーロッパの国々はすべて、単一のヨーロッパ通貨、ユーロの導入に賛成である。そこで、英国も態度保留をやめて、大勢に従うべきだ。

...

人は、遺伝子情報を伝達するためのひとつのサバイバルマシンである。

...¹²⁾

これらについて解説したあと、学生には例年、自分および周囲、日本の現状に思いを巡らすよう指示する。平成 23 年度以降、自分の周辺や日本に該当するケースが多いと学生が判断する項目を挙手させて確認することにした。すると、毎年多いのが、「バスに乗り遅れるなの誤謬」の他に、「下を見ろ」の議論（他の問題を考慮しないで、もっと不幸な事態に目を向けるべきであるという議論＝喫煙者に対してさまざまな工夫をするより、自分の落ち度がないのに病気になった人にさまざまな工夫をすることのほうが善いことだ）、部分化の誤謬（グループ全体の特色を、個々の要素に置き換えることができる、全体の真は部分においても真であるとする議論＝〇〇〇は国際法を馬鹿にしている、だから、〇〇〇の国民は誰ひとり、信用ならない）などであり、根強い人気（？）を保っているのが、連鎖（積み重ね）の誤謬（小さい差をどんなに積み重ねても大きな差にはならないという議論＝タバコ 1 本くらい、どうということはない）、太った牛の誤謬（太った牛を追う牛追いは、太っていなければならない、つまり、連想によって特徴を結びつけるという思い込みによる議論＝皮膚をナチュラルな感じに近づけたいなら、X ブランドの化粧品を使ってごらんさない、無添加の化粧品だから）などであることがわかった。「伝統だから」の議論（伝統は、伝統であるというだけの理由で、保持されなければならないという議論）は減少傾向にあるものの、「問題ない」の議論（はっきりした不満や反論がなければ、問題はないという議論）は増加傾向にあるのは、社会情勢をいくぶんか反映しているのであろうか。

2.3

見出し、反論など、型にこだわると、学生にとっては、指定された条件にあてはめようとするあまり形だけ整えて済ませたい課題となるおそれがある。それは、作文への興味関心を一層失わせることにならないか。

このことについては、前稿にも触れたが、私としても継続して考察中であるので、ここでひとまずまとめたい。

型にあてはめることは、部分部分にかかる時間と整理整頓するための時間との双方を必要とする。しかも、短時間で作業しなければならない場合、はじめから全体を構想するための知性が不可欠となる。ところが日本人は、ごく大雑把に言えば、文学的な、特に感情を刺激するような文体を潜在的に好み、仕事文のような明確さの追求については軽んじる面があるように思える。もちろん、文学的な文章に知性が伴わないわけではない。このあたりの事情は簡単には論じられないし、さまざまな文学への学生の興味という点も改めて調査する必要がある。ただ、知的な作業が際立つような文章になるほど表面的な感情表現は後退しがちとなる。行き着くところが仕事文である。そこに抵抗があるのか、あるいは、そのような文章はそうした関係者が書けばよいことで、自分の日常生活には支障がないと思っているのであろうか、国語が得意と称する者でも、どちらかという文学鑑賞には熱心だが、文章の意味を明確になどという話になると途端に授業への関心を失う。面白くない、感動しない、すなわち、人間的な真実性が置き去りにされているというわけであろう。

しかし、本校の専攻科生においては、前報告での調査の段階では、型があると書きにくい、型を習っても応用することが難しいとの感想が多かったものの、最近の授業へのアンケート調査や聞き取りでは次のような感想もみられるようになり、少なくとも授業の効果がゼロではないことがわかった。

- (1)自己の文章における論理性について反省する機会になった。
- (2)いきなり意見を述べよと言われるよりは型があるほうが書きやすいし、覚えておくと他への応用もできそうだ。
- (3)何をどこに書くとよいか指示してあるので筋道が立てやすい。

(2)については、書く機会には型を利用しているとか、実際の就職試験で作文が課せられ、その場で対処するしかなく、型の作文を思い出し、うまく書くことができたと思っているなど、専攻科生および卒業生の報告を受けている。(3)は、作文が苦手だと自称する学生の言である。実際に作文してみて書きやすいと少しでも感じる学生がいるのなら、文章に明確さを求めることが単に束縛であるとは言えない。

理屈はどうあれ、学生にとっては、授業なのだから取り組むほかないのが現実であろう。けれども、課題を与える者としては、その課題をいかなる根拠

で敢えて提案できるのか、説明を求められているつもりで考えをめぐらし、できるだけ意識化しておきたいのである。

仕事の現場では往々にして、その時々すぐに処理しなければならない要件が出てくる。その際に、真実性の表現は安易にはできない、コミュニケーション上の明確さなどということよりも中身が大切だとの名目で、何ら行動しないでいるならば、それはそれでかえって文章というものの内包する力を失わせることになる。状況次第では無責任でもある。それでも人は、自分の好む真実性を正しいと信じ、惑溺する。おそらく、真実性なる“本体論”化された領域が快感をもたらすため、できればそこから外には投げ出されたくないのであろう。

専攻科の作文は、どちらかといえばコミュニケーションの観点に比重があり、文章を型にあてはめる意義もそこに存する。書き手はいわば、真実性なるものを先験的に操作できる権利は持たない状況に置かれている。

フランスの哲学者デカルトは言った。

実生活の行動はしばしば一刻の猶予も許さないのだから、次のことはきわめて確かな真理である。どれがもっとも真なる意見か見分ける能力がわれわれにないときは、もっとも蓋然性の高い意見に従うべきだということ。しかも、われわれがどの意見にいつそう高い蓋然性を認めるべきかわからないときも、どれかに決め、一度決めたあとはその意見を、実践に関わるかぎり、もはや疑わしいものとしてではなく、きわめて真実度の高い確かなものとみなさなければならない。われわれにそれを決めさせた理由がそうであるからだ。

(中略)

生き方については、ひどく不確かだとわかっている意見でも、疑う余地のない場合とまったく同じように、時にはそれに従う必要があると、私はずっと以前から認めていた。これは先に述べたとおりである。だが当時わたしは、ただ真理の探究にのみ携わりたいと望んでいたもので、これと正反対のことをしなければならないと考えた。ほんの少しでも疑いをかけうるものは全部、絶対的に誤りとして廃棄すべきである、その後で、わたしの信念のなかにまったく疑いえない何かが残るかどうかを見きわめねばならない、と考えた。¹³⁾

「生き方」の次元と「真理の探究」の次元とを区別するとすれば、「実生活」では、「生き方」の次元がほぼすべてであるような状況下、何らかの判断を

要請されることがしばしばであるとみなすべきである。では、もし先ほどの真実性が「真理」へと昇華して普遍性を持つと称されるに及んだとしたら、「真理の探究」は、あらゆる瑣事を差し置いた根本問題になるのであろうか。

話が大きくなってしまったが、成り行き上、ここで私の見解を敷衍してみたい。それには、「真理」をどのようなものとしてとらえるかを、まず論じておかななくてはならない。

デカルトの論はともかく、およそ現実世界の営みにおいては、何かを具現化しようとする、そこには必ず「真理」は二つ“あらわれる”、すなわち、その局面ごとに「真理」は二つ認識されざるを得ない。一つのもを「真理」だと措定した途端に他方のものも“「真理」となる”から¹⁴⁾。ここでの「真理」は、ただ単に自己の正当性を主張し得る自由を持つ限りにおいての「真理」である。本授業の作文で真実性は大事だがコミュニケーションも重視しますよとか、相手の反論に対する再反論の根拠とかいうように。現実世界に対して「真理」とか普遍性などというものが具体的に有効なのは、それらが自ら、置かれた状況から離れないように制御する規律を内包している時のみである。ところが、何でも想定可能な思考世界においては、「真理」は言語や心情、想像力などと結託し、“「真理」となる”つつしみを越え、“「真理」として存在する”というふうに、横暴にも絶対化していくのではないか。その、“「真理」として存在する”という考えを、私はひとまず捨象したいと経験的に感じている。そして、デカルトの「真理」については別途、研究したいと思う。

“「真理」として存在する”という考えは、どちらが正しいかということに敢えて決着をつけようとするあまり、その根拠として、現実世界を超越した次元の話を持ち出そうとする欲望に基づくのではないか。問題化＝“「真理」として存在する”＝欲望というふうになつてしまっているのである。しかし、それは必ずしもうまくいくわけではない。世の中を観察すると、“「真理」として存在する”何かが、ものごとの優劣・上下の比較を消滅させるどころか、かえって補強させる基盤になっている、あるいは結果的にそうになってしまうように見受けられる。

そもそも、問題の解決とは、どちらが正しいかという問題設定に支配されないように、それを終着点としないように行動することではないのか。

それは、絶対的「真理」を楯に他方を無視したり敵対視したりするのではない。他方の価値を知りつつ、ある場合には惹かれつつ、いま自分に身近な方を選択するのである。自分を具現化するために、急

がば回れ、「真理」と合体しようとする欲望からひとまず遠ざかるのだと言ってもよい。

鏡 高野喜久雄

何という かなしいものを
人は 創ったことだろう
その前に立つものは
悉く 己れの前に立ち
その前で問うものは
そのまま 問われるものとなる
しかも なお
その奥処へと進み入るため
人は更に 逆にしりぞかねばならぬとは¹⁵⁾

「人」は自己認識するがゆえに勝手に問題をこしらえる「かなしい」生きものである。「しかも」、「奥処」とか、「真理」とか、何かが見えた気になるが、そちらに行こうとするほど踏み迷う、あるいは、本当は反対の方向に行くのがいいのではと疑うなど日常茶飯事である。

「奥処へと進み入る」ように誘惑されるから「かなしい」のではない。「しりぞかねば」と思うから「かなしい」のではない。進む＝しりぞくといった思考のわなにとらわれず、ただしりぞいては、そのあたりで遊んでみてはいかがであろうか。

そこで、文章の話へもどろう。文章表現という世界は、なかなか「見きわめ」られない。そこで、「奥処へと進み入」らずに一時停止し、とりあえず型による一つの書き方を選択して「従う」。「実践」的にまず可能なのは、一つのことではかないから。だが、その書き方に習熟してくると、一つの文章構成能力を身につけたがゆえに、他方の書き方の価値を再認識できる。すると、真実性を具現化できる可能性も二つに広がったことになる。

自分から遠ざかることで自分がより完全になる。そうすると、ことさらに「真理」を「見きわめ」ようとしなくてもよい境界に至るかもしれないのである…。わが“絶対”を解体して自由になり、敢えて不自由な道を歩いてみる意義もあるのではなかろうか。

さて、本校では、作文の型ということについて次のような報告があった。少々古くなったが紹介しよう。

本校の教育会議での資料として学生相談室長から配付された資料によると、特別講演として、作家であり大学教授の大岡玲氏が次のように述べている。

(1)作文指導等で、思ったことを自由に書けという

課題を出すと、書けない、書くことがない、書きたいことがない、自分はつまらない人間だ、と思い込む生徒が多い。実際には考える方法、プレゼンテーションの方法を知らないだけであり、テーマ、枠組み、話す順番（好きか嫌い、その理由、それにかかわるエピソードなど）を提示してやることで、徐々に書けるようになる。

(2)ことばに関しては、学ぶ＝まねぶ、である。自分は日本人学生にも、留学生に日本語を教えるような意識で授業する。小学生から高校までの国語の授業は、言葉は技術であると認識し、ひたすら型をまねさせる訓練をさせることが大切である。教科書に載る名作と呼ばれる作品もつまらなければつまらないと言ってよいし、読み方を抑圧することは避けなければならない。

(3)自分が担当する「日本語表現」では、状況説明、自分の見解、それを裏付ける根拠を論理的に述べる訓練をもとに、個人の意見を、公共の場で認知させる努力を通じて客観性を持たせる技術を身に付けさせようとしている。¹⁶⁾

ここには文学鑑賞タイプとはちょうど反対の学生について取り上げられているようにみえる。だが、文学好きであっても、それは小説などを読むという面についてであり、何にせよ書くことは苦手だという学生もいる。私も学生時代、小説などを好み、読み耽った経験があるが、それが文学作品を書く方面に積極的に繋がったわけでは決してなかった。また、他人が、あれはすばらしい作品だと喧伝していても、読んでみて全く興味の湧かないものもあった。しかし、文学かどうかにかかわらず、現実的には日々、あれこれと書かなければならなくなっている。だから、書くという場でとりあえず問題となるのは、前提として文学が分かるかどうか、あるいは究極の“名文”が書けるかどうかではないであろう。すなわち、対象が文学かどうかなどではなく、思うこととすることとの違いに気づかされ、困惑に直面しなければならないという事実なのである。

さらに、大岡氏のいわゆる「抑圧」については、次の点にも留意が必要である。作文などによって学生が劣等感を持つのは、思索や心情理解の面で優れた“内容”があらかじめ在って、それは世間や教員によって決定されているから、自分の書いたものはどうせ否定されるという幻想によるのも事実である。試験の解答で、結局は先生が教えたとおりに書かないと正解にしてもらえないのでしょうかとのコメントを学生からいただくことがよくあるから。ただ、この場合、たとえ文学作品であっても、読者が自由に

解釈するしかない部分がある一方、一定の見識を得ないと理解できない部分もあって、後者については、正解に対して学生が何と批判しようが、どうにもならないのである。だから、学生が幻想を持ち「抑圧」を感じるのも当然だと言えば、ある面では、それはそうなのである。

ところで、型の作文は、いわばルール付きのスポーツである。ルールは、本来、個人を「抑圧」するためにあるのではなく、客観性を持たせやすくするためによいわけである。とりかかりの段階では「抑圧」に見えても、書く内容までは「抑圧」しない。つまり、どのような題材を扱っても、「抑圧」を問題解決の方法に変容させ得る。このことは、是非とも学生には認知してほしい。前稿で同様なことを述べ、あれから数年たったが、基本スタンスは、こうした点については変わらない。

作文の授業の進行具合というものが、私にとっては、以前よりは明確になってきた気がする。まずは書き方を学生とともに改善する作業を続けていくにつれて内容が成熟してくるのである。はじめから正解が決まっているわけではない。方法さえ守れば何でも表現でき、出てきた表現を検討する際は教員と学生との区分けを超えて客観的に表現そのものについて討議できるので、慣れてくれば学生も自在感が味わえる。

およそこの世の中で何かを達成するためには、単純な反復練習を意識的に行なうのも効果的である。だから、試みる前の思い込みやとらわれはひとまず置いて、その場にふさわしい方法に依るとよい。作文では、与えられた型を使用する。が、型は型であるがゆえに書き手個人の限界を自然と抜け出させ、真実性の世界に誘うこともある。それを手応えとして感じ取れる学生もいるに違いない。

2.4

学生の実作例を示し、それについての私の思いを述べる。

本授業のような場での課題も、やりかたによっては単なる作業を超えたものになり得ると、ひとまず結論づけておきたい。型の作文は、文体や目指すものが文学とは違いこそすれ、それと対峙できるような感動を生み出すことも不可能ではないのである。

ここで、専攻科修了生 T 君の実作を紹介しよう。課題第1回、第2回の順に並べてある。これらは、授業が試行錯誤の状態で、まだ事前ミーティングも十分に行なえていなかったころに書いてもらったものである。いずれも初稿段階の文章で、無意味な同

語反復などがみられたので、それらは私が省いて掲載した。また、書き方や論拠の具体性といった面で再考する余地があり、実作後のミーティング時間にも、数点を彼に伝えた。それから、ここに書かれたことすべてがそのまま実態ではなかったかもしれず、しかも何年か前の文章であるから、現状との食い違いがみられるかも知れない。ここにお断りしておく。私としては、あくまでも作文構成の一例として彼の書いたものを受け取り、その限りにおいて学生と二人で文章の改善を試みた時間があつたということ以外ではない。ご高察いただけると幸いである。

食堂車の必要性

食堂車は、いわば「動くレストラン」である。一昔前には各地の特急列車や急行列車、はては新幹線にも連結され、寿司やそばを提供する列車も存在するなど、その形態も多種多様であつた。しかし、現在ではグレードの高い寝台特急にしか連結されていない。

海外では食堂車は多く、旅をする上での醍醐味になっている。さらに、食堂車があることで旅の負担を減らすことができるとも言える。例えば、駅弁を買って車内で食べる時には、弁当がらなどのゴミが発生し、捨てる手間がかかる。車内販売がない列車では、車内で食事を取る場合には外から持ち込まねばならず、そもそも荷物が増えてしまうのである。

効率化を目指す企業側としては、食堂車を連結すると人件費によってコストがかさんでしまうという意見があるだろう。また、一両丸ごと食堂車にするよりは、輸送人員を増やすために座席車を組み込むべきだとの考え方もあるだろう。だが、企業は、列車に乗っている間くらいは客に「安らぎ」の場を与えてもよいのではないだろうか。特にテーブルと椅子のある広い空間で、暖かい食事をゆっくりと楽しむのは、バスや航空機のような他の交通機関には真似のできないことであり、鉄道ならではの「ウリ」としてアピールできるだろう。鉄道会社にとって食堂車は決してマイナスの要素ばかりではなく、「くつろぎのある交通機関」として企業イメージを向上させることも可能だと思う。

冒頭でも述べたとおり、日本では、食堂車は敷居の高い存在という認識になりつつある。そこで、全国各地の代表的な特急列車や観光列車などに連結して、大衆化をはかってもよいのではないだろうか。料理の材料に地産品を使って、その土地を

前面に出した経営にしたり、ビジネス利用が多い列車ではカフェにしたりするなど、食堂車を活かすアイデアは多々ある。新たな食堂車スタイルが展開できれば、再び全国に食堂車が復活する日も近いかもしれない。

JR 日南線への提言

JR 日南線は、南宮崎と志布志を結ぶローカル線である。沿線には青島、飫肥といった有名な観光地が点在している。しかし、現状ではこれらの観光地を活かしきれておらず、利用客のほとんどは地元の学生やお年寄りなど、マイカーを持たない層に限られている。さらに、その利用客ですら減少している。そこで、大々的な PR を行なったり、観光列車を運転したりするなど、観光利用を促進させて、利用客の増加をはかる必要があると思う。

宮崎県が全国的に注目されている昨今だからこそ、観光利用の促進に関して、ある一定の効果が得られるものとして期待できる。そして、日南線の利用が増えれば、相乗的に沿線地域にも観光客が増えて、地域を潤わせることもできる。

日南線のような「地方」に投資するよりも、福岡などの都市部や、九州の各都市間輸送に投資した方が採算が得られるという鉄道会社側の意見もあるだろう。しかし、そのような策がすすめられていくことは、地域格差を生じさせる原因ともなる。こうした状況を打開するためには、地元も会社も積極的に地域活性化の案を出し合い、それをしっかりと実行することがこれからは重要となろう。もちろん、会社が採算をとることは前提であって、ある程度の低コストで実行できる策が十分に練られなければならない。

観光利用の促進には、旅行会社の団体ツアーとの提携をしたり、宮崎空港線への直通運転を行ない空港からの観光客を直接取り込んだりして、地元や会社が積極的に外地の人々を受け入れる体制の整備が必要である。住民も、このような活動にできるだけ協力し、自らも日南線を利用して、地域全体で日南線を支えていけるようにすべきだろう。日南線沿線を中心とした県南地域から、宮崎県をいっそう盛り上げてほしいものである。

(以上)

T 君は根っからの鉄道好きであった。それを知ったのは彼が 3 年生の時、国語の授業を担当して話をする機会を持ったからである。それ以降、二年間のブランクを経て、彼が専攻科に進学したため再び授

業を担当することになった。作文のテーマについてあれこれ思案していた彼に、こうなったらもうすべて鉄道でいこうと持ちかけたのは私である。

明確さを意識して淡々と書くように指示されているため、感情の表現は露骨ではない。しかし、この作文には彼なりに表現に工夫しようとした跡がうかがえ、無味乾燥になっているなどということはない。

私がもし彼の担任として一般的に彼の学生生活を見ていただけだったとしたら、あるいは、国語の授業で講義するだけだったとしたら、彼のこのような世界を具体的に引き出すことはできなかったに違いない。一学生と一教員としてのやりとりは頻繁だったかも知れないが。私は、専攻科の授業で、最初に結論ありきで教えたのではなく、また、人間性がどうのこうのといった問題に言及したこともなく、型の作文を一つの方法・道具として間接的に彼に接しただけであった。にもかかわらず、彼の人生を「形」にすることができた。このことを私はいまでも幸福に思っている。しかも、日南線には、「県南地域から」「宮崎県をいっそう盛り上げ」る「観光列車」、《海幸山幸》が盛況となった現在、ひととき感慨深いものがある。

授業で論理とか型とか言い始めると途端に教室は真冬になり、あたりには、すべてを凍らせてしまう冷たい風が…だが、そのうち暖かい春も訪れる。それが摂理というものである。

3 言語表現のあり方をめぐって

読み手の理解ということについて、次のような指摘がある。口頭報告や、レポート・論文の「重点先行主義」ということについてのものである。

私はかつて米国人 M 氏と上記のようなことを議論していて、こう言ったことがある。

「英語国民はぼくらよりらくにトップ・ダウンの話ができるんだろう。英語では文の頭に主語と述語がくる。日本語では文の要になる述語が文末にくる。おそらくその影響で日本語では、話をするにしても最後に結論を言うほうが自然なんだ。英語では、ビコーズという接続詞のおかげでトップ・ダウンの文がらくに書けるということもあるしね」

彼の反応はいささか意外なものだった。

「ぼくらだって、自分で考えるときはボトム・アップで考えている。しかしぼくらは、こども

の時から、人にものを説明するときにはトップ・ダウンで話しなさい、書きなさい、ときびしく仕込まれているんだ」

M氏の話に見られるとおり、ものを考えるときの順序と他人に話すときの順序とはちがえるべきだ。これは大切なポイントである。¹⁷⁾

最近よく問題とされるコミュニケーション不足を解消し他人とのやりとりをスムーズにするためには、公共の精神を涵養することが急務であろう。いつ自分が他人を結びつける先導的な役目にならないとも限らない。文章表現についても、個人的な好き嫌いだけでは済まされない事態に直面しているわけである。

コミュニケーション、明確さという観点から言えば、文章の型のみならず、一文一義の原則とか、文を短めに書くようにとか、仕事に関連した限りでの文章表現の指南書には一様にそうアドバイスしてある。忠実に従えば、意味の分かりやすさの追求と引き換えに、文章からは、さまざまなニュアンスが少々後退するかもしれない。だが、それが直ちに非人間的なものを意味するわけではないことは、学生の実作にも見たとおりである。では、次のような例はいかがであろうか。

ある雑誌から中上健次の『千年の愉楽』の一部の英訳をたのまれて、読みもせずに承諾してしまってから、その第一ページを開いてみたとき、かなりのショックを覚えた。その書き出しとなっている、次のことばの流れのような文章に、ぼくは日本の現代文学の中で出会ったことはなかった。

明け方になって急に家の裏口から夏芙蓉の甘いにおいが入り込んで来たので息苦しく、まるで花のにおいに息をとめられるように思っただけでオリュウノオバは眼をさまし、仏壇の横にしつらえた台に乗せた夫の礼如さんの額に入った写真が微かに白く闇の中に浮きあがっているのをみて、尊い仏様のような人だった礼如さんと夫婦だった事が有り得ない幻だったような気がした。

一つの長い文章だ、とぼくはすぐ反応した。…
(中略)

一九七〇年代に入ってから日本の現代文学よりも、六〇〇年代、七〇〇年代の古代文学から、『千年の愉楽』に体当たりしたように読み、そしてその一部を翻訳してみた。だから、『千年の愉楽』

を最初に開けた瞬間のおどろきと、その作品が「難しい」という鮮烈な第一印象に取って代わり、数ページ入り込んでいくうちに、この文体、というよりも、この語り方は、日本語の長い歴史の中ではかならずしも異質なものである、この「美しく」ないどころか、むしろ荒々しいことばの流れにはある種の、歴史に保証された必然性があることが、だんだん分かってきたのである。¹⁸⁾

ここに取り上げられた作品は、確かに、反仕事文法的な、いわば呼吸の深い文である。ただ、ここから得られる感銘は、決して、文の意味をまるきり犠牲にして成立したものではない。ひとつの文が、部分部分の表現は明確でありつつ、なお時空を広く体現できるリズムで構成されているのである。難解とされる『源氏物語』のような作品であっても、同様に、「難しい」けれども文自体が訳の分からぬものなのではない。

総じて、文章を含めた、これからの言語生活のあり方には、以下に述べられたような柔軟さが求められる。

対欧米を中心とする国際折衝において、また国際会議において欧米的な言語習慣が優先することは、現状では避けがたい。また、ビジネス(仕事)の側面における言語生活が欧米的であるべきだということは、現代的な能率優先の文明は主として欧米文化の所産だということと深くかかわっている。現代文明を支えている自然科学の分野で欧米的なものの言い方が重んじられるのは、科学はそういう言語習慣とともに育ってきたものだということを考えれば、当然の事態である。

しかし言語活動には、ビジネスの面だけでなく、人と人との交わりという大切な側面がある。この面での日本人同士の対応は昔のままにしておきたい – 少なくとも意図的に変えることは避けたい – と私は考える。人と人との私的な交わりの面で、もっぱら相手を立てようとし、婉曲で間接的な表現を好むならわしが失われれば、それは日本人のアイデンティティの喪失に通じかねないのである。私の念願は、これから巣立つわかい人たちが、仕事の面や国際交渉の場では明快・明確にズバリと発言し、日本人同士の私的な交際では察し、察せられあう優美なものの言いができるように育ってくれることだ。これはかれらにスイッチ・ヒッター(機に応じて右でも左でも打てる打者)になってもらいたいということである。¹⁹⁾

私も授業では常々、学生に話す。メールの文体とレポート等の文体とは自然に書き分けているはずだから、社会に出ても公私の区別をつけていけばよいのであり、いわゆる若者言葉が日本語の乱れによるというわけでは必ずしもない、と。言語を使用する場面ごとに、同じ内容でも表現は異なっているからである。

もし公的な状況に対応し、そこに習熟するためということであれば、何の分野であれ、一定の基礎訓練は避けられない。このことは、私が本校に在職し、教職員の方々とも情報交換する中で、いっそう強くなってきた考えである。多くの学生、さらには多くの日本人にとっては、文章表現、言語表現の明確さというものは、その訓練の対象として意識しなければならぬ難題かもしれない。だが、そうだとしてみてもなお、日本文化は所詮あいまいだからなどという言い分には賛同しかねる。以下、サッカーに関する十数年前の新聞記事による。

（監督は）イングランド戦の前には「このチームを輝かせる」というテーマを掲げていた。具体性に欠け、ゴールを巡る攻防というサッカー本来の目的との結びつきも不明確。だがなぜか、我々日本人はわかったような気になる。

技術革新で成功した日本企業を研究した一橋学名誉教授の野中郁次郎（75）は、経験や勘に基づき、言葉では伝えにくい知識やノウハウを「暗黙知」と名付けた。例えば職人の名人技がそれで、日本人は暗黙知に高い価値を置くという。

言語で整理された西洋の知に対し、日本にも劣らない独自の知があるはず、と野中はその研究を始めた。「だがよく調べると、技術革新は暗黙知が言語化される過程で起きていた。成功のカギは、西洋か東洋かではなく、両方の知を兼ね備えることだった」²⁰⁾

4 まとめ

自分の体験や社会状況をよく見つめる過程で見えてくるものをこそ表現すべきだと先ほど述べた。以心伝心もよい。一方、言語化も必要である。

日常生活の至る所に、具体的に何かを達成するための、平凡だが肝心の“方法”が存在している。私自ら、いわゆる「先ず隗より始めよ」²¹⁾の姿勢を継続しておきたい。

注

- 1) 松崎賜：実用的文章を作成するための授業について、都城工業高等専門学校研究報告第 41 号、pp.101-112,2007
- 2) 樺島忠夫：文章構成法,講談社現代新書, pp.136-137, 1988
- 3) 小野田博一：論理的に話す方法 説得力が倍増する実践トレーニング,PHP 文庫, pp.81-83, 2005
- 4) 小野田博一：同 p.76
- 5) 小野田博一：同 pp.38-39。なお、木下是雄：日本語の思考法, 中公文庫, pp.42-67, 2009 などとも参照されたい。
- 6) 細川英雄、他：国語表現Ⅱ【改訂版】、三省堂, pp.14-15, 2010
- 7) 木下是雄：同 pp.19-31
- 8) 孫子（謀攻篇）
- 9) 小野田博一：同 pp.114-115
- 10) 小野田博一：同 pp.118-119
- 11) 論語（衛靈公篇）
- 12) ジャン・リード,イアン・グラウンド：考える看護 ナースのための哲学入門, 医学書院, pp.48-51, 2001
- 13) デカルト：方法序説, 岩波文庫, pp.36-37, p.45, 2007
- 14) 以下、『莊子』に基づいた点がある。
- 15) 小海永二：現代の名詩, 大和書房, pp.275-276, 1990
- 16) 第 48 回全国学生相談研修会参加報告, 2011/1/17
- 17) 木下是雄：同 pp.18-19
- 18) リービ英雄：日本語を書く部屋, 岩波現代文庫, pp.129-132, 2011
- 19) 木下是雄：同 pp.64-65
- 20) 朝日新聞：2000/6/3（木）
- 21) 劉向：戦国策（燕策）